

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

柿沼亮介

【所属】(助成決定時)

早稲田大学高等学院

【研究題目】

古代東アジアにおける「移民」の国家的支配に関する研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、古代東アジアにおける「移民」の比較研究を行うものである。古代東アジアの「移民」の存在形態としては、朝鮮半島における高句麗・百済・新羅の興亡などの影響で日本列島へと渡ってきた渡来系移住民（いわゆる「渡来人」「帰化人」）のような政治的「移民」の他に、中国各地に集落を形成した在唐新羅人のような経済的「移民」も注目される。こうした「移民」（在留外国人や外国系の人々）に対する国家による支配のあり方を分析することで、そこに顕在化する当時の社会や国家のあり方を解明することを目指す。本研究によって地域や人々の視点から国家のあり方や国家間交流について再検討することで、二項対立的に国家間関係を捉える見方を脱し、ひいては近代における主権国家を単位とする国際関係の枠組みを相対化することが可能となる。「移民」は国際的な紛争の火種とも成り得るが、一方で国と国とをつなぎ、社会を発展させる重要な存在であったことを明らかにしたい。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、古代東アジアの政治的・経済的「移民」についての比較を行った。政治的「移民」としては、高句麗や百済の残存勢力と日本の渡来系移住民が挙げられる。660年に滅亡した百済と668年に滅亡した高句麗の残存勢力は、その後も新羅や中国の領内において旧王族が冊立されるなどして政治的に利用された。また日本の渡来系移住民の場合、特に百済や高句麗からの亡命王族・貴族が「百済王」や「高麗」などを賜姓され、政治的な役割を与えられた。百済王氏は朝廷の中でも高い地位を占めることになるが、桓武朝をピークとしてその後は存在感が薄れていく。これらの人々に対する国家の対応の変化や、社会への同化の過程について、国際関係や王権の存立基盤に注目して検討した。

経済的「移民」としては、在唐新羅人や筑紫に滞在した新羅や唐の商人が挙げられる。中国の山東半島から江南の沿海部の各地には新羅人の集落がみられ、彼等は本国と行き来するだけでなく集落間のネットワークを形成し、日本の遣唐使の帰国を援助するなど、社会的に重要な役割を担った。また、大宰府鴻臚館での交易やその後の博多での交易に際しては、新羅人居留地や唐坊が設置され、新羅の商人や唐・宋の商人が交易地周辺に居住した。こうした経済的「移民」の居留地の形成過程や居留形態について、運営のあり方や都市の中でのような役割を果たしていたかという点に注目して検討した。

なお、新型コロナウイルスの感染拡大により、海外調査を実施することが困難であったことから、当初予定していた研究内容のうち、高句麗・百済の残存勢力に関する研究と、在唐新羅人の居住形態に関する研究については、文献の収集によって基礎的研究のみを行った。かわりに、北部九州や瀬戸内海地域において古代の対外通交経路に関する現地調査を実施し、「移民」や商人の居住地に関する検討を行った。

【結論・考察】(400字程度)

政治的「移民」については、百済や高句麗の残存勢力は唐と新羅が対立する状況下でその立場が確保され、倭国への遣使なども行った。しかし、新羅から「高句麗王」として冊立された旧高句麗王族の安勝が拠点を金

馬渚から王都である金城に移され、新羅の貴族社会に同化していくなど、唐と新羅の関係が安定する中で残存勢力は政治的役割を終えた。また、唐の衰退を背景として日本においても「帝国」型の国家構造が清算されていくことで、百濟王氏の貴族社会における存在感は薄れていき、他の渡来系氏族も改姓が盛んに行われるようになり、「異民族」性を喪失していった。経済的「移民」については、在唐新羅人は交易・流通上の要地に集落を形成し、それを自治的に運営したのに対して、筑紫に居住した外国商人は国家による管理の下で居住地が設定された。ここには、中国と日本における国内に居住する「異民族」に対する支配方法の違いが反映されていると考えられる。なお在唐新羅人については、都市の中に居住区が設定された事例もあれば、都市から離れた場所に集落が形成される事例もあることから、両者の違いについての検討を今後の課題としたい。